

二〇二四年度 同朋大学 文学部
学校推薦型選抜（公募） 小論文 問題用紙①

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、作問の都合上、一部中略した箇所がある。

私は大学にはいつて二年近くの間、大学の講義にはほとんど失望していましたし、親しい友人はいましたが、何か心の中に求めているものがあってもそれがなんなのか解らないまま悶々としていたのです。そのために一人で秩父や南アルプスの山々を歩きまわっていました。

大学の二年間悩んでいたことがなんであったか本人にもよく解らなかつたのですが、上原先生（※）のお宅を訪ねて以後、私の生活は変わったのだと思います。少なくとも私は、おとなになるということはすばらしいことなのだ、と思ったからです。世間的にも高名な学者たちがただの大学二年生の前で対等な態度であいさつされただけでなく、まったくなんのわけへだてもなく会議に参加するよう促すという事態は、それまでの私には想像することさえできないことだったからです。少なくともここには私が理想とする人びとがいると、そのとき私は思いました。

上原先生のゼミナールにはいつてからのちも、その期待が裏切られることはありませんでした。当時は暖房に石炭をたいていたので、ゼミナールがはじまる前に係の学生が用務員室に石炭をとりに行くのです。用務員さんはこのゼミですかと聞き、上原ゼミですと答えると、それではもう一杯あげようと石炭をたくさんくれたのです。私は上原先生は人望があるのだなと思いましたが、あるときそれがよく解りました。

それはなんでもないことでしたが、上原先生が歩いておられたとき、用務員さんが用事があつたらしく、先生に話しかけたのですが、そのときの先生の態度をみて感心してしまったのです。相手がだれであろうとまったく同じ態度で接しておられたのです。このようにいいますと温厚でやさしい先生を想像されるかもしれませんが。まったくそのとおりなのですが、学問についてほしいへん厳しい方でした。

〔中略〕

またある学生が卒業論文のテーマにドイツ詩人リルケを扱いたいといつて、なぜリルケをとりあげるのか、自分にとってリルケはどのような存在なのかを詳しく説明したあとで、じつはドイツ語ができないので、翻訳で研究をしたいといつたときにも先生は驚くほど厳しい態度で叱責されたのです。

「あなたがリルケに賭けようという気持ちはよく解りますが、そのような態度があるのにドイツ語ができないという些細なこととは問題にならないでしょう。リルケに賭けるといつておきながらそのような姿勢では、賭けようとする姿勢そのものも怪しく見えます」と厳しく指摘しておられたのです。

先生のゼミナールで勉強をした二年の間にいろいろ印象深いことがありましたが、二つほどあげておきたいと思えます。それはある学生が三木清（※）の研究をしたいといつて、いろいろ書物をよんで卒業論文の報告をしたときのことです。先生は次のようにいわれたのです。

「あなたの報告を聞いているとまったくそのとおりだと普通なら思うでしょう。つまり、三木清の著作だけをよんでいけばそうならざるをえないでしょう。でも私にはそれはまったく違って思うのです。なぜなら私は三木清を知っているのです、あなたの報告はまったく違うと思つてしまうのです。この問題をどう考えるかですね。書物を通して三木清の人間に迫らなければならぬということになるのでしょうか」。このコメントを聞いて私はむずかしいものだなと思ひ、今でもおりにふれてこのことを思い出します。

もうひとつは同じようなことなのですが、研究のあり方について先生が、「人物であれなんであれ、研究対象に惚れこまなければ対象をとらえることはできないでしょう。けれども惚れこんでしまえば対象が見えなくなつてしまひます。ですから研究者は、いつも惚れこんだ瞬間に身をひるがえして、現在の自分にもどつてこられるようであればいけない」といわれたことがあります。

そのときはなるほどと思つて聞いていたのですが、よく考えてみると、とても私にはできそうもありませんでした。私は思ひこみが強く、何かに惚れると夢中になつてしまふたちでしたから、惚れていながら身をひるがえしてもどつてくるなどということは、私にはできないと思つたのです。

そののちかなりたつて、私は次のように考えて、先生のことばを私なりに解釈しました。それは「対象に惚れこんでいる自分を、どこかで冷静に見つめているもう一人の自分を考えてみる」ということです。惚れこんでいる状態は決して見よいものではないでしょう。あまり格好のよい状態ではないかもしれせん。惚れこんで周囲が見えなくなつていふような状態の自分を、どこかで自分がじつと見ているということなら私にもできるのではないかと思つたのです。

（阿部謹也『自分のなかに歴史を読む』ちくま書房、二〇〇七年）

※上原専祿：昭和期の歴史学者でドイツ中世史を専門とし、戦後はあたらしい世界史像の形成を模索した。

※三木清：大正から昭和前期に代表される哲学者で西田幾多郎やハイデッカーに師事。

二〇二四年度 同朋大学 文学部
学校推薦型選抜（公募） 小論文 問題用紙②

問1

この文章のうち、線で囲んだ部分について、傍線部「研究のあり方」に焦点をあて、一五〇字程度で要約しなさい。

問2

文章の全体を踏まえて、「文学部（歴史、文学、文化、教養、仏教、思想）での学び」について、今後大学で「あなたが学びたいこと」を含めて、四〇〇～六〇〇字で述べなさい。